

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第七主日(7/4)礼拝

「泣き虫ペトロ、泣いてる場合？」

ルカ福音書第22章54節から第22章62節

【聖書】

ルカによる福音書22:52 それからイエスは、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。53 わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」54 人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。

ペトロは遠く離れて従った。55 人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。56 するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座しているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。57 しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。58 少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。59 一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。60 だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。

61 主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。62 そして外に出て、激しく泣いた。

1 導入

今日の聖書テキストは、とても有名なエピソードです。私も幾度も説教で取り上げてきました。しかし、聖書とは不思議な書物です。読む度に、時に応じて、新しいことを教えてください。今回は、52節の主の言葉「だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」から、「光」と「闇」という事を思いつつ、テキストを繰り返し読んでいたのですが、そこに浮かび上がったのは、「ペトロの罪」でした。あんなにイエス様の傍らにいて愛され、その言葉と行いを最もよく教えられていたペトロ。彼が主イエスを三度も、「自分はイエスと何の関係もない」と否定する、それは闇の行い。彼は主を捨て、自分の光を見捨てました、自分の命を守るために。そうして、却って真っ暗闇の滅びの道へと足を踏み入れてしまったのです。それはいく

ら号泣したってすむ話ではないであろう。しかし、私達だって、このペトロと何ら変わらない一面、情けない一面を持つ。泣き虫ペトロ、泣き虫私たち、その涙は何の涙なのか？今は自己憐憫で泣いている場合なのか？自分の甘さにも気づかされました。そんな泣き虫ペトロの物語に暫くの間、共に耳を傾けていきましょう。

2 三度の否認

剣で対抗しようとする弟子を押しとどめ、敵の傷を癒し、「今は、闇の力が支配する時」とおっしゃって、主イエスは、祭司長達に逮捕されます。そして、犯罪人として後ろで縛り上げられ、大祭司の屋敷へと連行されます。真夜中を過ぎていたでしょう。捕まったのは主イエス一人、弟子たちは夜の闇に紛れて散ってしまいました。

しかし、主が連行されていくのを、遥かに離れて追う人影があります。イエスの一番弟子と言われたペトロでした。彼が一行の後を追って辿りついたのは、ユダヤ人社会の頂点に立つ大祭司の邸宅。屋敷からは真昼のように多くの人たちが立ち働くざわめきが聞こえます。おそるおそる中庭をのぞき込むと、主を捕らえて来た人々が、焚火をたいて、その周りに腰を下ろして体を温めています。ペトロは、勇気を振り絞り、彼らにまじって座り込む、その方が怪しまれずに、主イエスがどこにおられるか、探すことができると、考えたのかもしれませんが。

暫くすると、一人の女中が焚火の炎に照らし出される自分の顔を無遠慮にまじまじと見つめる視線に気づきます。ここの「女中」は、まだ若い女召使や女奴隷を指す言葉。まだ幼さの残るような彼女は、ペトロを穴があくほどに見つめて、ペトロを指差し、周りの大人に訴えます。「この人は、あの逮捕された男と一緒にいた人です。」彼女は、主イエスとペトロと一緒にいた所を、エルサレムのどこかで見たことがあったのでしょう。ペトロを映し出す焚火の光が、彼の正体を顕わにします。ですが、まだ年端もいかぬ女召使の言うこと、無視することができた筈。しかし、動揺したペトロはむきになって否定します。「女中さん！私があの人を知っているわけがない。」しかし、その少し後、今度は一人の男がペトロを見て、ズバリいいます。「やはり、お前はあの連中の仲間だ」ペトロはきっぱりと否定します。「君！私は違う。仲間なんかじゃない。」その後、一時間ほどの間は何事もなかったようです。しかし、人々の疑念は拭い去られてはおらず、みな疑いの目でペトロをじっと観察していたのでしょう。ある男が確信に満ちた強い口調でペトロに迫ります。「確かにこの男も一緒にいた。ガリラヤの者だから。」今度

は、ペトロが主イエスの仲間だと主張する具体的な根拠も挙げています。ペトロは、「君！君が何を言っているのか、私にはさっぱり判らない」と打ち消すしかありません。ですが、皮肉な事に、強く否定するその言葉が、ペトロとは何者であるかをはっきりと示していました。ガリラヤ地方は、エルサレムの遙か北。外国人も多く住む地方であり、エルサレムとは異なる独特の方言があったと言われていました。現代日本で関東人に関西人が混じって話せば、すぐに「関西出身の人だ」と分かるのと同じです。愚かな事ですが、そんな事にもペトロは気づいていません。

数時間前、最後の過越祭の食事の席、最初の聖餐式の食卓でペトロは主イエスに断言しました。「主よ、ご一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しています。」彼は、最初、この自分の言葉通り主イエスと一緒に牢に入り、共に死ぬつもりで、主のあとを追って大祭司の屋敷に入り込んだのでしょう。ですが、主を逮捕した人々と共に、焚火の周りに腰を下ろすことで、彼は、大きな恐れに囚われたのではないかと思います。焚き火の周りでは主イエスについての噂、誹謗中傷が語られ、大祭司の権威に逆らう重罪人であると盛り上がっていたことでしょう。「あんな奴は、十字架に架けられ、生きながら鳥に食われて死ぬのにふさわしい」と。彼らの話を聞くうちにペトロは怖くなりました。ペトロは、主と共に死ぬことは、祖国独立のために、又神の国の実現の為に命を捨てる英雄的な死、かっこいい死だと勘違いしていたかもしれません。ですが、実際は違います。神についての最高権威である大祭司や律法学者達に逆らう重罪人、神の敵として人々に罵られそしられて惨めに死んでいく、まさに犯罪人の死である事に気づかされた。「そんな惨めな死は嫌だ、怖い」犯罪人としてみんなに見捨てられ、神に見捨てられ死んでいく事に言い知れぬ恐れを感じたのでしょう。だから、ペトロはここで、三度、主イエスの仲間であるという事を否認しました。私達の聖書、新共同訳では訳されていませんが、原文では、三度とも、相手に対する呼びかけがあります。最初は、「女中さん！私があの人を知っているわけがない。」二度目は、「君！私は違う。」三度目も「君！君が何を言っているのかさっぱりわからない。」というふうに。ペトロは、告発者達に必死で呼びかけ、「自分は犯罪人イエスの仲間じゃない。ここで一緒に焚火に当たっている君たちの、大祭司様の味方だ」と訴えてたのです。

彼は、この時、主イエスという光を見失い命への道を見失っていた。その罪は決して軽くもない、小さくもない、天の御神が耳を背けたいと思った裏切りの言葉でした。

だから、突然鶏が鳴いたのではないのでしょうか。三番目の告発者に向かって、ペトロが必死で「君！」と呼びかけ、「君が何を言っているのかさっぱりわからない。分からない！」と否定している言葉が言い終わらないうちに、朝を告げる鶏の声が、夜明け前の闇の中に響いた、と聖書は語ります。誰も予想していなかった突然の鶏の声。まるで、ペトロが主イエスを否定する言葉を全部言わせたくないように、そんな言葉はもう聴きたくもないというようなタイミング。この鶏に早すぎる時を告げさせたのは、天の御神であったのではないか、と思えてなりません。その鶏の鳴き声は、深い闇を切り裂いてペトロの心にも響きました。

ここで、福音書をまとめたルカは、一度聴いたら忘れえない一文を記します。「主は振り向いてペトロを見つめられた。」四つの福音書のうち、こう記すのはルカのみですから、これが目に見える形で起こった事なのかどうかは判りません。ペトロが焚火に当たっていた大祭司の大邸宅の中庭に、犯罪人として捕らえられていた主イエスがずっと留置されていたわけではないでしょう。別の場所にある牢屋に入れられていた主イエスが、裁判が開催される場所に移される途中に、ペトロのいた中庭を連行されていた、そのタイミングで鶏が鳴いたのではないかと推測する学者もいます。

物理的にどうであろうとも、この時、主イエスが、ペトロのことを振り返った、主イエスが心と体、その全てをペトロの方に向けたのは真実だと思います。主は、逮捕の時も連行の時も、まっすぐに前を向いておられた。全ての人の罪を贖う十字架、神の怒りの杯が注がれる時を見つめて、ご自身の道を進んでおられた。しかし、突然に鳴いた鶏の声によって、主イエスは、恐れで満たされ闇に囚われたペトロを思い起こし振り向いた、それは緊迫した時を前に、主イエスが心と体、その全てをペトロに向けてくださった、という事です。

「主は振り向いてペトロを見つめられた。」この「見つめられた」と訳されているギリシャ語は、女中が「じっと見つめた」や二人の男がペトロを「見た」と言う時に使われる単語とは、異なる言葉が使われています。「見つめた」と訳されている言葉は、「in」や「into」を示す前置詞と、「眼差しを向ける」とも訳される動詞が合わさった言葉であり、「眼差しの内に入れる」とでも訳したくなります。疑いに満ちた視線でも、あざさがしをしたりする視線でもない、人が人を裁く時のような眼差しでもない、単なる見えるものを見るというわけではない。

ペトロの弱さ、ずるさ、いい加減さ、愚かさ、罪深さを鋭く射抜き指摘しつつも、ペトロの全存在をその眼差しの内に包み込む眼差し。あなたは愚かで弱く罪深かい、サタンに篩にかけられ、あなたは私を裏切った、だが、そ

れでもなお、私は決してあなたを知らないとは言わない、あなたが何をしようとも、私は決してあなたを見捨てない、あなたは私の愛する弟子だ…。そうペトロに告げた主の眼差しであったでしょう。

4 ペトロの号泣

この主イエスの眼差しに包まれて初めて、ペトロは、主の言葉を思い出した、とルカは語ります。「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」実際は数時間前に聴いた言葉です、忘れる筈がないようですが、それから主の逮捕、連行等があったわけですからすっかり記憶に残っていなくても仕方ないかもしれません。そして、主の言葉を忘れたペトロであったから、「主イエスとは関係ない」と強く口にする事もできたし、実際に主イエスを自分の心から追い出す事もできました。そんな情けないペトロでさえ、主イエスが振り返り、その眼差しの内にしっかりととらえてくださったからこそ、ペトロは主イエスを思い出す事ができました。自分の罪を指摘する言葉、その言葉に湛えられた深い主イエスの愛と悲しみと共に想い起す事ができたのです。

しかし、そのペトロは、大祭司の邸宅の外に出ました。屋敷の内に、逮捕され縛られ裁判の席へと連行されていく主イエスと共にあろうとはしなかった。逃げるように外に出て、激しく泣いたのです。何故でしょうか？主イエスの眼差しに深い愛を見出したなら、主のあとを追い、「私もこのお方の仲間です。一緒に裁いてください。」と言えなかったのでしょうか。不思議なことです。まるで主イエスの眼差しを避けるように、外へ逃げ出し、そこで号泣するとは。

確かに自分の罪を泣くほどに悔やむ事は、信仰の上でも大切だとも思います。ですが、泣くというのは、甘えが付け入るスキもあります。泣いたら許される、という打算がペトロを突き動かしていたのでしょうか。

いえ、この時のペトロの涙には、打算はなかったのだと思います。彼は自分に絶望した。だから激しく泣いたのだと思います。取返しがつかない自分の罪を深く悔い悲しむ慟哭、主に従って死にきれない自分に対する絶望であったでしょう。

では、なぜ、ペトロは、この時、主と共に逮捕されようとしなかったのでしょうか？その確かな答えは判りません。ただ、主イエスご自身がそれまで何度も予告しておられたように、主は、犯罪人として排斥され裁かれ、十字架で惨めに死ぬことも、ペトロはこの時、本当に納得した、もう自分が一緒に死んだとしても主の十字架を変えることなどできない、全てはもう手遅れ

だ、自分は決定的に間違ってしまった、そう思ったというのは考えられます。また、彼は深く自分に絶望していたし、何をどうしていいのかも分からず、茫然自失であった事は確かでしょう。ペトロは、死んだも同然、いえ、ペトロはここで死んでいました、生きる屍と化していました。

そんなペトロが自ら命を絶たなかったのは、ただただ主イエスが父なる御神にとりなしの祈りを捧げてくださっていたからに違いありません。主イエスが最後の過越祭の食事の席でペトロに「シモン、シモン、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、きょうだい達を力づけてやりなさい」と仰ったから。

そして、ペトロが、主の言葉のとおり立ち直る、甦るのは、これより三日目のこと。十字架で死んだ主イエス、葬られ、そして甦らされた復活の主イエスと出会った時です。自分に絶望し、自分の命に死んだペトロが、主イエスにある命に新しく生まれ変わらされた、そして、更に五十日の後、聖霊が注がれ、新しいペトロは、主イエス・キリストの甦りの命に立ち直ることができました。外に出て哭いたペトロ。ペトロにとって、自分に絶望し切ることが、立ち直りへの第一歩、永遠の命への第一歩でした。

5 私達の物語

こうして見てきますと、このペトロの物語は、私達信仰者のリアルな物語だと分かります。誰も自分の力で、主イエスを救い主とする信仰を得る事などできない。自分の力で、十字架の主イエスが、復活した甦りのキリストだと信じる事はできないのだとつくづくと思わされます。自分の力で、自分の限界、死や絶望を乗り越える事などできない。状況に巻き込まれ、恐れを抱き、神から離れてしまうしかない。また、自分の信仰を誇り、行いを誇り、神から離れてしまうしかない。ペトロが、自分の信仰を頼りに告発者達に対して、「そうです、私こそ、あのナザレ人イエスの一番弟子のペトロです」と堂々と主張できたとしたら、彼は自分を誇る気持ちを捨て去ることができたでしょうか。自分の闇とイエスの愛を知る事ができたでしょうか。できなかったでしょう。私達は、本当に主イエスに従って生きようと願えば、自分に絶望するしかないのだと思います。自分に絶望して、主なるイエスにこそ希望を置く、それが私たちの命の道。主がいつも私達を振り返り、その眼差しの内に生かしてくれるからこそ、私たちは安心して、自分に絶望し主イエスに希望を置く事ができるのです。主の眼差しの中で慟哭する泣き虫ペトロは私達の姿です。泣き虫ペトロが、イエス・キリストにあって立ち上がるには、古い自分のお葬式を出して涙が涸れるまで徹底して泣き絶望するしかあ

りません。

さて、6/26にこの礼拝堂から天にお送りした西原アツ姉の書いてくださった信仰覚書には、「“せんかた尽きるとも、のぞみはつきじ”（コリント信徒への手紙Ⅱの文語訳の言葉）を、繰り返し口ずさみます」とありました。「せんかた尽きるとも」というのは、人間的な手段は全部やり尽くして、もうできる事は何もない、完全に行き詰っている。人間的には絶望するしかない状況だ、という事です。しかしにも拘わらず、「希望は尽きない」、何故でしょうか？それは、自分たちに希望を置くのではなく、主イエスへの希望に生きているからです。主イエスはどんな苦境にあったとしても、命への道を示してくださるお方。だから、「望みは尽きない」。主の眼差しの内に留まれば、主にある希望は尽きないのです。泣き虫ペトロはせんかた尽きる、もうどうしようもなくなる。しかし、彼は、ただただ父なる神の慈しみによりキリスト・イエスに希望を置く道を示されました。

私たちも同じです。私たちも泣き虫ペトロ、せんかたつきたら泣いていい。しかし、泣きながら、嘆きながら、父なる神に叫びをあげましょう。何故なら、永遠の命への道、被造物である私達が神の子として生きる道が既に開かれたのだから、主イエスが十字架と復活によって開いてくださったから。だから、私達はどんな時でも天の御神を父と呼んで助けを求める事ができるのです。その時、涙は喜びへと変わります。主イエス・キリストを思い起し、父なる神に叫びをあげる。それがキリスト・イエスの血によって神の子とされた私達の歩む道です。そのような救いの道を開いてくださる父なる御神とキリスト・イエスを賛美せずにはられません。